
笑顔

三亞野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔

【Zコード】

N6412B

【作者名】

三里野 雪子

【あらすじ】

クラスの委員長になる程、強気でさっぱりとした性格の亞矢。だけど、肝心の恋愛には全くの初心者で、気持ちを伝えられないでいた。そんな時、二人つきりになるチャンスがきて、ついに。

似合わないことをしている

がやがやと賑やかな教室。今はお昼休みだ。女子同士、男子同士、カップルなどがそれぞれ一緒にお昼を取っている。

「亜矢！今日も自分で弁当作ったの？」

「へへ、まあね。お母さん夜仕事しているから朝起きれないの」

髪の短い少女、これが今回の主人公。佐藤 亜矢、高校一年生。クラスの委員長に立候補するくらいまとめ役で人望の厚い人物である。友達の相談を受け、誰にでも優しく平等に接することの出来る人物だが、自分の悩みは相談出来ないでいた。

それは 。

恋の悩みなのです。

学校から帰った亜矢は自分の枕を抱えて悶える。自分の財布から写真を取り出して見つめた。

友達とたわむれて笑う少年が撮られていた。顔を染めて彼女はにやける。恋の話は女子にとって楽しみなのだが、何故彼女は相談出来ないでいるのか。それは彼女の性格上有問題がある。

友達からの信用が厚い彼女は今まで恋というものに悩まされたこと

はなかつた。中学からの友達が多いこの高校に入つてから初めて恋というものを経験してしまつたのだ。だが、今更そう言ひ話が出来なくて、一人で悩み続けているのだ。

「片想いして早一年。この状況から何も変つてい私の

ぐちぐち悩むのは私らしくないのに

頭を抱えて悩む亜矢はがばつと枕を持ち上げて起き上がる。決意に燃えた瞳を写真に向けて無意味に叫んだ。

「よおしー今月中に告白するぞおおーー！」

つと、言つてもだ。

移動教室のため、教科書と筆記用具を両手で抱えて友達と移動しながら亜矢は思案に暮れる。告白、と言葉にするのは簡単だが、実際やるのは難しい。

丁度前を歩いていた自分が愛する人物を見つめる。

少し茶色がかつた柔らかい髪が流れ、同じ色の瞳が見える。彼の名前は河野 藍人。同じクラスの男子だ。

「あ、今誰か見つめてたでしょ？」

「え？ち、違うよー何言つてんのー！」

「その反応怪しい？誰見つめてたの？」

思わぬ友達からの攻撃に顔を赤くして否定する。だが、前にいる男子を順番に見ていく、ついにバレた。

「もしかして河野？」

「嘘！亜矢、まさか！」

「な、何よー何か文句あるの？」

もう、否定することも面倒になつた彼女は簡単に肯定してしまつた。
友人達は互いに顔を見会わせてニヤリと意地悪い笑みを浮かべた。

「そつかー、やつと亜矢にも春がきたのかあ」

「言つとくけど、高校入つてからすぐだからね」

「ええ！何で今まで黙つてたの？」

「だつて……がらじやない気がして」

意外な彼女の反応に友人は嬉しそうに笑つた。無言で頭を撫でたり、
抱きしめたりとやりたい放題だ。意味がわからない彼女は苦しそう
に表情を歪ませる。

「もう、何なのさー！」

「いやあ、可愛いなあつて思つて」

「うんうん、亜矢にもこんな一面が

結局、バレても相談と言える会話は出来ずに彼女は授業に入つてしまつた。

日直の仕事だつた亜矢は帰りに残つて黒板を綺麗に掃除していた。
黒板消しを綺麗にしようと思を開けて棒で叩く。だが、手をすべら
せてしまい、棒を落としてしまつ。

「あつ」

身を乗りだして見ると、そこには一人の男子がいた。落ちた棒に気付いてそれを拾う彼に躊躇なく彼女は叫んだ。

「すみません！今取りに行きますから持つていてください！」

その人の返事も聞かず、顔も見ず、彼女は教室から出る。階段を下り、上靴のまま外に飛びだした。プール脇の道を通りすぎて棒を落とした場所まで走った。そこには棒を拾った男子が一人。

「ありがとうございます。って、河野君だつたんだ」

「ああ、さすが委員長。行動派だな！人の顔も見ないで来るなんて。悪戯する奴だつたらどうすんだよ」

「人は疑わずに信じるべし！つてのが私の家の家訓なの。だからほら、こうして棒も私の手の中に戻ってきた！」

めちゃくちゃな言い分に彼は思わず吹き出した。腹の底から笑う彼に少し照れながら彼女も笑う。

ふと、彼女は気付いてしまった。この場には一人だけだと。

「あ、あの」

「え？何？」

心臓がうるさいくらい鳴っている。体温は急上昇し、顔は火照っているのがわかる。今言うべきなのかわからない。だけどこのチャンスを逃せばおそらく自分は一生言わないだろうと悟り、勇気を振り絞る。

「私、河野君の笑顔に惚れたの！私とお付き合いして下さー！」

顔を下げるため彼の表情はわからない。だが、確かに張りつめた空気は伝わってきて、彼女は恐くて目が開けられなかつた。しばしの沈黙。聞こえるのは風の音と自分の心臓の音。

「…………笑顔つて」

やつと口にした言葉で顔を上げる。そこには満面の笑顔。

「この顔？」

「え？」

何が言いたいのか理解出来なかつた。ただ、この笑顔はわざわざ作つていてるものだと気づきただけがわかつた。

亜矢は何も言わずにいたらそれを肯定と受け止めたのか、彼の表情が一変する。今まで見たことのない人を見下す目つきに背筋がぞつとした。

「あんた、うざいね。マジむかつく」

そう言い残してその場からさつと消えてしまった。呆然と立ち尽くす彼女はその場に座り込んだ。

「…………違つ

『これ、お前のか？』

「あれじやない」

込み上げてくるものを抑えながら亜矢は立ち上がりた。彼が去った方向に走り出す。途中何人かの生徒とすれ違つたが、気にする様子もない。

ただ、彼の後ろ姿だけを探して足に力を込める。

「河野藍人！」

「！」

やつと見つけた彼に彼女は容赦なく叫ぶ。公衆の面前で。それが目に入っていないのか、藍人だけを見つめて更に言葉を繋げる。

「誰がその笑顔が好きって言ったのよーむしろ嫌いよーそんな嘘つぱちの笑顔！」

「え……」

『あ、はい！ そうです！ ありがとうございます』

『よかつたあ。違つてたらどうしようかと』

おそらく互いに同じシーンを考えて言葉を放っている。

「覚えてないの？」
「覚えてたのか？」

時期は高校受験のその日。

二人が初めて顔を会わせた日だ。

「私が言つた笑顔は あの日見させてくれた笑顔だけだよ」

先程とは違う、スッキリとした気持ちできつぱりと述べた。

「嘘つ…まさか、そんな！」

始まりはこの日。彼女がこの高校に受験しにきた日のことだ。持つて来たはずの受験票を落としてしまった。

鞄の中を全て探し、制服のポケットを探る。が、ない。

顔を真っ青にして、彼女は焦る。集合時間まであと三十分。この時間で探しだせるのかわからない。

とにかく行動だ！と、気持ち直して来た道を戻つてみる。

「あの」

必死に道に這いつぶばつて探す矢矢に声をかけてきたのは同じ受験にきた男子。

彼はすぐ困惑した様子で彼女に話しかける。

「これ、お前のか？」

見せられたのは少し汚れている自分の番号が書かれた受験票。思わず涙を浮かべて受験票を受け取った。

「あ、はい！ セリです！ ありがとうございます」

「よかつたあ。違つたらどうしようかと」

「本当にありがとうございます…これで受けられるう」

「はは。もう無くすなよ」

彼はすく爽やかに、穏やかに笑みを浮かべて他の生徒にまみれて消えてしまった。

亜矢は呆然とその姿を見やり、感じたことのない気持ちに顔を傾げる。

「あの人も私も……受かるかな？」

「初めて会つたあの時のあの笑顔に私は惚れたの！ 勝手に勘違いして勝手に失望なんかしないでよ！ 意味わからないじゃない！」

「なつ、そんな事言つたつて、愛想笑いのあの笑顔を好きになつたなんて言われたら誰だつて悲しむに決まつてるだろ！」

「何でよ…」

「俺だつてお前のこと」

言いかけて口を閉じる。

ぱちくりと瞬きを繰り返す彼女を一瞥して、顔を真っ赤に染めた

「私が何よ？」

「…………っつづ…」

忘れかけていた。ここにはかなりの観客がいた。にぎにぎと見学する野次馬がそこら中にいる。それがわかつたのか亞矢は口を歪ませて笑った。

「な、何笑つて！」

「あははー！ 気にしすぎー。じつはこつかは噂で知られるんだからましきつ言つちゃいなよー！」

彼は彼女に想いを寄せたことを後悔した。これから幾度なくこのような経験をすると悟つたからだ。
優しくて、賢くて、勇敢で、カッコいい。それが憧れで悔しい。

「俺もお前のこと好きだよ」

「じゃあ、本当の笑顔を私にちょうだいー！」

「あ、あつたー！ やつたー！」
「よしー！ 受かったぞー！」

隣の声に顔を見合わせる。そこには前に一度だけ見たことある顔。

「おお、合格したのか？」

「う、うん。貴方もでしょ？ おめでとうー！ 同じクラスになれるとい

いね

その時、自分のことのように喜んでくれた彼女の顔が。
太陽のように明るく笑うその顔が藍人は忘れられなかつた。

「「大好き」」

この日、高校に入る前から生まれた片想いが一つ、無くなつた。

それは散つたのではなく

合格とはまた違う

花が咲いたから

(後書き)

ええ、いじめでお付き合って下わった旨様。ありがとうございます。

わけのわからない小説だなあって思つたことじゅう。すみません。
私もわけわからない気がします。

あまり追及せずに読んで下さい。励ましのお言葉をかけてくれると
非常に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6412b/>

笑顔

2010年12月3日14時02分発行